

【原 著】

保育施設における子どもの人間関係形成能力を育む
共同造形制作のための基礎的研究

山口 実梨 高橋 慧 馬場 訓子 渡邊 祐三 高橋 敏之

Fundamental Study to Create a Joint Modeling Bringing up a Skill to Build a Relationship
in a Childcare Facility

Minori YAMAGUCHI, Kei TAKAHASHI, Noriko BABA, Yuzo WATANABE,
Toshiyuki TAKAHASHI

2020

岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.10, March 2020

保育施設における子どもの人間関係形成能力を育む

共同造形制作のための基礎的研究

山口 実梨※1 高橋 慧※2 馬場 訓子※3
渡邊 祐三※1※4 高橋 敏之※5

近年の社会変化により, 子どもの遊びには変化が見られ, 主体性を発揮して夢中になれる活動や, 友達とやりとりをしながら創造性を発揮する機会が, 必要とされている。つまり, 遊びを通した子ども同士の関わりは, 道徳性・社会性を育み, 人間関係形成能力を育むための重要な課題であると指摘できる。人間関係形成能力を育むための活動の1つとして, 共同造形制作が考えられる。本論では, 子ども同士の関わりを作る造形表現活動の実践は, 1人では作ることができない大きな作品で, アイデアを多く必要とする「寄せがき方式」の制作遊びを設定して行うことが望ましいと考えられる。創造的な遊びには, 子どもにとって友達とイメージを共有して作る要素が多く, テーマや色や形を工夫していくことができると考える。

キーワード: 保育施設, 子ども, 人間関係形成能力, 共同造形制作

- ※1 御南まんまるこども園
- ※2 作陽音楽短期大学音楽学科幼児教育専攻
- ※3 くらしき作陽大学子ども教育学部子ども教育学科
- ※4 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生
- ※5 岡山大学大学院教育学研究科

I 現代における子ども・児童・生徒の人間関係の希薄化

1 現代の子ども・児童・生徒を取り巻く環境の変化

近年, 子ども・児童・生徒の人間関係の希薄化が問題となっている。その背景として, 少子化, 核家族化, 近所付き合いの減少, ゲーム機等の一人遊びの増加等がある。これらの背景要因にして, 次のようなことが考えられる。少子化により, 親の期待が一人の子ども・児童・生徒に集中し, 過干渉や過保護の傾向が増大し, 生活からゆとりが失われている。都市化や核家族化等により, 兄弟姉妹や地域の同年代の子ども・児童・生徒や高齢者との触れ合いが減少している。ビデオやテレビゲーム等の機器に取り囲まれて生活する等, 室内での一人遊びの傾向が増大し, 戸外で自然と触れ合いながら遊ぶ姿が減っている。これまでの子ども・児童・生徒の集団の中で伝えられてきた遊びを成立させることは難しく, 遊びが喪失している⁽¹⁾。以上のような問題が影響し合い, 人間関係の希薄化が生じている。家庭環境や地域社会の変化から, 他者と意思や感情をやりとりするための人間関係形成能力が不足しており, 友達等, 周りの人

と関わることを苦手とする子ども・児童・生徒が増加している⁽²⁾。このような子ども・児童・生徒の増加により、将来周囲の人と協力して身の回りや社会の問題を解決しようとする社会になりゆく可能性が考えられる。

本論の執筆に際し、用語の統一をしよう。これまでの論述でも、既にそうして来たが、就学前の者を「子ども」とし、さらにその中で、幼稚園に在籍する者を「幼児」、保育所に在籍する者を「保育所の子ども」、こども園に在籍する者を「園児」と定義する。また、就学前から義務教育を終えるまでの者を「子ども・児童・生徒」とする。ただし、引用文献で用いられているこれらの用語にはこの定義の限りではない。さらに、本論で定義した「子ども」である期間を「幼児期」とする。期間を示す際は「幼児期」という表現を使用するが、幼稚園の幼児だけでなく、保育所の子ども、こども園の園児も含むものとする。

2 文部科学省・厚生労働省・内閣府の子どもの人間関係に対する見解

(1) 文部科学省の見解

文部科学省は、「幼児期は、知的・感情的な面でも、また人間関係の面でも、日々急速に成長する時期でもあるため、この時期に経験しておかなければならないことを十分に行なわせることは、将来、人間として充実した生活を送る上で不可欠である」としており⁽³⁾、幼児期において豊かな人間関係を経験することの重要性を述べている。しかし、近年の子ども・児童・生徒の育ちの現状について、基本的な生活習慣や態度が身につけていない、他者との関わりが苦手である、自制心や耐性、規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下している等の課題を指摘しており⁽⁴⁾、実際には近年の子ども・児童・生徒が抱える課題の多くが人間関係の希薄化によるものであることが窺える。

このような現状を踏まえ、文部科学省は、子ども・児童・生徒に求める能力として人間関係形成能力を挙げている。社会構造のグローバル化が進む現代では、多様な価値観が存在する中で自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共に、それぞれ異なる意見や考え、アイデア等を交換し、正解の無い課題、経験したことの無い課題を解決していかなければならない関係性が否応なく日常化する等、人間関係形成能力がなくてはならないものになるからである⁽⁵⁾。

(2) 厚生労働省の見解

厚生労働省は、子ども・児童・生徒がいつも遊ぶ場所について1990年と2000年の比較をしている。2000年では、よく遊ぶ場所として「自分の家」(56.8%)、「友達の家」(46.3%)が主に挙げられ、公園や児童館を挙げる者は1割を切っている。この10年間に就学前の子ども・児童・生徒がいつも遊ぶ場所は友達の家や公園・児童館から自分の家や家の周りへ大きく変化しており、行動範囲は非常に狭いものとなってきている。また、1990年は「自分の家」が8.2%、「友達の家」が65.5%であるのに対し、2000年には「自分の家」が74.5%に増加、「友達の家」が30.7%に減少している。このことから、学校園外での友達との関わりが減少していることが分かる。

さらに、いじめを注意したこと、友達のけんかをやめさせたことの経験に関する、1999年に行われた調査では、いじめを注意した経験について、「まったくくない」が41%、「あまりない」が38%、けんかをやめさせた経験について、「まったくくない」が30%、「あまりない」が38%となっており、どちらも半数以上がいじめやけんかに対する注意について消極的であることが分かる。このことから、近年の子ども・児童・生徒は、困難な人間関係を回避する傾向が窺える。

この調査から厚生労働省は、「子どもの社会や地域社会における人間関係の希薄化が子どもの心身に影響を与えていることをみた」としている⁽⁶⁾。子ども・児童・生徒の人間関係形成能力は、社会の変化に加えて子ども・児童・生徒自身も、特に困難な人間関係において回避する傾向が見られるため、現代において育むのは困難になっていると言える。

(3) 内閣府の見解

内閣府は、2004年に一般的な人間関係についてどう感じるかについての調査を行っている。その結果、人間関係が「難しくなった」と感じている人は63.9%と6割を超えている。さらに人間関係が「難しくなった」要因として、「地域のつながりの変化」(54.3%)、「人間関係を作る力の低下」(44.5%)、「核家族化」(41.8%)、「親子関係の希薄化」(32.3%)等、周りの人とのつながりの変化をあげる割合が多い。この調査から、「どのようなつながりを持つかは、日々の生活を安心して快適に過ごすことに、ひいては充実した人生を送ることに、大きく影響を及ぼすと考えられる」としている⁽⁷⁾。

さらに内閣府は、幼児期について「ものや人との関わりにおける自己表出を通して、幼児の育ちにとって最も重要な自我や主体性が芽生えるとともに、人と関わり、他人の存在に気付くこと等により、自己を取り巻く社会への感覚を養う等、人間関係の面でも日々急速に成長する時期である。このため、この時期における育ちは、その後の人間としての生き方を大きく左右する重要なものとなる」と述べており⁽⁸⁾、近年の人間関係の変化を踏まえた上で、幼児期における人間関係形成がその後の育ちにとって重要なものになることを示している。

3 幼児教育関係告示文に見る子どもの人間関係

『幼稚園教育要領』(2008)は、5領域の中の「人間関係」が最も多く改訂された。「内容」及び「内容の取り扱い」で新たに示されたのは、「共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどすること」や、「他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する」ことや、「互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、決まりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにする」こと等である。主に他児を含めた周りの人との関わりが重視されるようになったことが指摘できる⁽⁹⁾。また、『保育所保育指針解説書』(2008)では、改訂の背景の1つとして家庭や地域において人や自然と関わる経験が少なくなっていることが指摘されている⁽¹⁰⁾。これらは、前述で見た少子化、核家族化等

の社会的背景，それによる子どもの人間関係に対する感覚の変化から，指摘されたと考えられる。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2015）によると，認定こども園制度の背景には，少子化の進行による子ども集団の小規模化がある。子ども集団の小規模化は，子どもの育ちに影響を与えるものであろう。周りの人との関わりを広げたくても広げられない状況にならないためにも，認定こども園制度が進められてきたことが分かる⁽¹¹⁾。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』（2015）では，他者との関係について，「他者との関係の広がりがある深まりにもつながっていく」と述べており⁽¹²⁾，人間関係の広がり，深まりが重視されていることが推察される。

『幼稚園教育要領解説』（2018）によると，領域「人間関係」の「ねらい」に「一緒に活動する楽しさを味わうこと」が，「内容の取扱い」に「やり遂げることの達成感」と「前向きな見通し」が新たに示された⁽¹³⁾。今後は，協働的な活動を行うだけではなく，その活動における幼児の心情・意欲・態度を重視して保育をすることが求められる。また，2017（平成29）年の改訂では，『幼稚園教育要領』（2017）・『保育所保育指針』（2017）・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（2017）の内容の整合化が図られた⁽¹⁴⁾。したがって，幼稚園・保育所・認定こども園において，同様のことが言える。

4 近年の社会変化による園・子どもへの影響

（1）家庭・地域社会に代わる幼稚園・保育所の役割

中澤潤（2000）は，子どもの仲間関係・友達関係について，「親や教師など大人との関係とは異なり，ほぼ対等の力量をもつ者同士の関係」とし，「互いの欲求の直接的なぶつかりあいも頻繁に生じることになるが，それもまた幼児にとっては大きな学びの機会となる」と幼児期の仲間関係・友達関係の重要性について述べている。その上で幼稚園・保育所の役割について，日本の出生率の低下傾向は止まらず，きょうだいや近所の遊び仲間の少ない子どもが益々多くなっていることを指摘し，「こうした少子時代の幼児にとって，保育所（園）・幼稚園といった集団保育の場で出会う仲間との交流は，社会性を促すうえで大きな役割をもっている」と述べている⁽¹⁵⁾。

また，榊原博美（2012）は，都市化による家庭や地域社会の変容による遊びの変化，仲間関係の喪失，情報メディアとの接触が増えたことによる直接経験の不足等の問題がもたらされており，このような現代社会の問題から人間関係の発達を家庭や親だけに任せることはできないと指摘する。そこで，保育内容「人間関係」の課題として，子どもの人間関係を豊かにすること，子どもの直接経験を豊かにすること，子ども同士の仲間関係を促すことを挙げており，「家庭を支え子ども同士の関係や仲間関係を育む集団保育の場としての幼稚園や保育所の役割がますます重要になってきている」と主張している⁽¹⁶⁾。

このように，家庭や地域社会は従来のような触れ合いの場となる機能が低下し，家庭や地域社会のみで人間関係形成能力を育むのは困難になっていること

が確認できる。幼稚園・保育所には、この家庭や地域社会に代わって子ども同士の交流の場を作り、人間関係形成能力を育むことが求められてきている。

(2) 子どもの遊びの変化

近年の社会変化により、子どもの遊びにも変化が見られる。松崎洋子(1996)によると、子どもは、遊びを通して遊びを考える思考力やそれを実行に移す行動力、そして自分のアイデアを仲間に伝える伝達能力、さらに仲間との交渉技術をも身に付ける。そのために必要な他の人の考えを聞く力や相手の意図を汲み取る力等も養われる⁽¹⁷⁾。遊びによって獲得されるこのような力は、人間関係形成能力を育むためには欠かせない力である。しかし、前述のように、近年の社会変化から園外においては室内での一人遊びの傾向が増大しているため、遊びを通して獲得するこれらの力が養えていないと考えられる。

また、佐藤哲也・田井敦子・畑中ルミ・赤木公子(2015)は、近年の社会変動や生活環境の変化により、子どもの遊びや玩具はより消費的なものになっており、具体性、創造性、人間関係、生活性という「幼児期にふさわしい生活」が欠けていると指摘している。近年の子どもの遊びについて佐藤らは、「家庭における遊びが「消費的」「個人的」な活動に偏る傾向にあるならば、幼稚園や認定こども園では「創造的」「集団的」活動を提供して、幼児に多様で総合的な経験を保障することが求められる」とし、子どもが主体性を発揮して夢中になれる活動、友達とやりとりをしながら創造性を発揮する機会が必要であることを述べている⁽¹⁸⁾。

近年の社会変化から、遊びが消費的、個人的なものに変化していることが分かる。幼稚園、保育所では、子どもが家庭では体験しにくい、創造的で周りの友達と十分に関わることのできる遊びを行う必要があると考えられる。

II 造形表現活動によって子どもの人間関係を育む意義

1 領域「人間関係」と領域「表現」の関連

『幼稚園教育要領解説』(2008)によると、領域「人間関係」とは、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」ものである。そして領域「表現」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ものである⁽¹⁹⁾。

まず、領域「人間関係」の内容(8)「友だちと楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする」について考える。子どもは友達と一緒に活動することで互いのよさや特性に気付くようになる。そしてイメージや目的を共有するようになり、自己主張がぶつかり、折り合いを付けることを繰り返しながら子どもは工夫したり、協力したりする楽しさを味わうのである⁽²⁰⁾。子どもは、友達と一緒に行動において他の子どもとの多様な関わりを持つことができ、人間関係を広げ、深めていくことができることが考えられる。

次に、領域「表現」の内容(7)「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする」について考える。友達と共通の目的をもって遊びを楽しめるようになってきた幼児について、「遊びの中での必要性から、幼児自らが色や形にこだわり、工夫して、かいたり、つくったりする姿も見られるようになる」と述べている。これは、子どもの思いや願いを実現する行為であると同時に、色や形の変化や組み合わせを楽しむ行為であり、子どもは、かいたり、つくったりすることを楽しむと同時に、自分の思いを表したり、伝えたりして遊んでいる⁽²¹⁾。このことから、友達と一緒にこなう造形活動では、それぞれがイメージをもって活動するようになり、またそれを友達同士で伝え合い、共有しようとするため、自分の思いを表現したり伝えたりする経験が得られ、領域「人間関係」の内容(8)と密接に関連することが確認できる。

さらに、領域「表現」の内容(6)「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」では、教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることで子どもは想像をめぐらし、感じたことを表現し合い、表現を工夫して作り上げる楽しさを味わうことができるとしている⁽²²⁾。内容(8)「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」では、子どもは一緒に生活を重ね、共通の経験や感動を伝え合う中で、次第にイメージを共有し合い、相手と一緒にして見立てをし、役割を相互に決めて、それらしく動くことを楽しむとしている⁽²³⁾。つまり、造形表現活動の他、音楽表現、劇表現の活動においても自分が感じたことを伝えたり表現しようとしたりする経験が得られ、人間関係が育まれることが推察される。このことから、表現活動は、幼児期の人間関係形成能力の一部を構成する活動であると言える。以上のことは、2017(平成29)年版でも、多少の表記の違いはあるが、文意は変わらない。

2 造形表現活動によって育つもの

熊本高工(1979)は、造形教育を行うことにより、①「意欲を養う」②「視覚を訓練する」③「手をきたえる」④「知能を高める」⑤「美しさを感じとる」⑥「伝統の美しさを知る」⑦「よい環境をつくる」⑧「人間関係を育てる」ことができると述べている。⑧の「人間関係を育てる」ことについては、「この世の中は多くの人々の協力によって成り立っています。共同制作というしごとは、幼い子どもたちに社会人としてのだじな基礎を培ってくれます」としており、造形表現では人間関係を含む多くの能力が養えると言うことができる⁽²⁴⁾。

また、中野友三(2002)は「幼児の絵は、幼児からのメッセージであり、大人が、幼児の世界を知る手がかりとなる。幼児はこのメッセージを、一番親しい大人(先生)や友だちに贈るために、時にはダイナミックに、ある時は内緒話しをするように絵をかく。幼児にとって、親しい大人に絵をみせることは、自分の世界や気持ちを知ってもらおうコミュニケーションなのである」と述べている⁽²⁵⁾。さらに、『幼稚園教育要領解説』(2008)によると、幼児の表現方法は、絵を描きながらその内容に関連したイメージを言葉や動作で表現する等、未分

化な方法でなされることが多い。このような幼児の素朴な表現を大切にすることにより、幼児は自分なりの表現が受け止められる体験をし、安心感や表現の喜びを感じることができ、表現を自由にすることができる⁽²⁶⁾。自由に表現をすることができることで、子どもは、より周りの保育者や友達に自分の気持ちを伝えることができると考える。

このことから、子どもの造形表現活動は、ただ描く、制作するというだけでなく、自分の思いを表現できることが分かる。そのため、造形表現活動は園での遊びの中で人間関係を豊かにするきっかけになり得る活動であると言える。

3 造形表現活動における課題

造形表現活動で育つ子どもの能力について見てきたが、ここで造形表現活動の課題について考える。

課題の1つとして考えられるのが、作った作品の出来栄を重視したり、造形の技術の指導ばかりになってしまったりすることで、子どもが制作をする過程を大切にできない可能性があるということである。良い作品を完成させた結果から子どもが達成感を味わうことができたり、様々な技術を知ることで表現の幅が広がったりする等の利点もあるが、それだけになってしまうと、どのような思いで描いたり作ったりしているのか等、子どもが活動の中で周りに伝えたい気持ちを保育者が受け止めににくくなることが考えられる。森上史朗(1982)は、子どもの表現と保育者の受け止めについて、「作品がきれいにできることだけを考えてしまう傾向はありますね。幼児の場合はもっとそのプロセスといったものを大事にしなければならないでしょうね」と述べている⁽²⁷⁾。良い作品を作ることができるよう指導するのではなく、子どもが作品を作る過程でどのようなことを感じ、何を楽しいと捉えているかを考え、保育を行う必要があると考える。また、『幼稚園教育要領』(2008)の「表現」では、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫することが新たに示されたが⁽²⁸⁾、それについて塩美佐枝(2008)も、「幼児の表現は、表現すること自体に価値があり、表現の過程で味わっている気持ちや表現の内容を受け止めていく」ことが重要であると述べている。さらに、「幼児同士が友達とかかわり、相手の表現を受け止め、自分の表現をより豊かにしていく過程を教師が受け止めていくようにしたいものです」とあることから⁽²⁹⁾、子どもの人間関係形成能力を培うという点からも、造形表現活動を行う上で、その過程を大切にすべきであることが言える。前述したように、造形表現活動は人間関係を豊かにするきっかけになることが考えられるが、一方で子ども同士の関わりも含めた過程が重視されず、作った作品の出来栄や造形の技術にだけ目を向けてしまっている現状も見られる。

これらのことから、活動を行う中での過程を大切にし、子どもの人間関係形成能力を育てる造形表現活動について考えていく必要がある。そこで本論では、幼稚園・保育所で行われている様々な活動の中から造形表現活動に注目し、現代の子どもに見られる人間関係形成能力不足の改善として考えられる、幼児期

における子ども同士の関わりを作る造形表現活動を実践し考察する。

Ⅲ 人間関係形成能力を育む遊び

1 子ども同士が関わる遊びの重要性

前述したように、近年の社会変化により子どもの遊びには変化が見られ、主体性を発揮して夢中になれる活動や友達とやりとりをしながら創造性を発揮する機会が必要とされている。文部科学省は、子どもの特徴について、子ども同士の人間関係に着目すると、0～1歳にかけて得られる基本的な信頼感を基盤として、次第に子ども同士で遊ぶこと等を通じ、豊かな想像力を育むと共に、自らと違う他者の存在や視点に気付き、相手の気持ちになって考えたり、時には葛藤を覚えたりする中で、自分の感情や意志を表現しながら、協同的な学びを通じ、十分な自己の発揮と他者の受容を経験していき、こうした体験を通じ、道徳性や社会性の基盤が育まれていくとしている。そしてこれらを踏まえて重視すべき課題として、愛着の形成・人に対する基本的信頼感の獲得・基本的な生活習慣の形成・十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得・道徳性や社会性の芽生えとなる遊び等を通じた子ども同士の体験活動の充実の5つがあげられている⁽³⁰⁾。このことから、遊びを通じた子ども同士の関わりは道徳性・社会性を育み、さらに人間関係形成能力を育むための重要な課題であるということが指摘できる。

2 共同制作に適した題材と子どもの発達

前述したように、人間関係形成能力を育むための活動の1つとして、共同造形制作が挙げられる。松井寿美子(2000)は、「幼児はグループで活動していても、実際は自分のものを一人で作っている場合が多い」としている⁽³¹⁾。そして、そのような特徴を踏まえ、共同制作の条件として、一人ではできない大きな作品であること、その大きさが必要条件である内容であること、内容が豊かで多くのアイデアを必要とすることを挙げている。この3点があることで、子どもは共同制作の際、周りにいる友達と意見を出し合ったり、意見を取り入れたりしながら一緒に作ることを楽しむことができると考えられる。また、田中義和(2011)は、共同して制作する活動には、「持ち寄り方式」と「寄せがき方式」の2つがあるとしている⁽³²⁾。田中(2011)によると、「持ち寄り方式」とは、集合画とも呼ばれ、それぞれが描いた絵を1枚の大きな紙に貼り、共同画にする方式であり、「寄せがき方式」とは、合同画とも呼ばれ、1つのテーマのもと、大きな紙に子どもたちがそれぞれ自由に描き込む方式である。この2つの方式を松井(2000)の3つの条件から考えると、一人ではできない大きな作品であること、その大きさが必要条件であることの2点は、どちらの方式でも満たすことのできる条件であると考えられる。内容豊かで多くのアイデアを必要とするという条件についてもどちらの方式でも満たすことができると考えられるが、「持ち寄り方式」の場合、1枚の紙に自分の作品を貼るため、それぞれの絵を完成させるまでの工程にアイデアを周りの友達から得ることはできにくい可能

性がある。子ども同士でより多くのアイデアを出し合い、共有し、より豊かなものにすることができるのは、「寄せがき方式」であると考えられる。本論では、人間関係形成能力を培うための保育実践を行うことから、子ども同士でアイデアを出したり、共有したりしやすい「寄せがき方式」が本論における保育実践に適していると言える。

さらに、遊び等を通じた子ども同士の体験活動を行うために適切な発達過程について考える。『保育所保育指針解説書』（2008）の発達過程を周囲の人との関わりの観点からまとめると、おおむね1歳3か月未満の子どもは、特定の大人との愛着関係が育まれる期間であり、周囲の友達に興味を持つことは少なく、保育者との1対1の関係が築かれる。おおむね1歳3か月からおおむね2歳の子どもは、友達や周囲の人への興味や関心が高まり、強く自己主張する姿も見られるようになる。おおむね3歳の子どもは、友達との関わりは多くなるが、実際には同じ遊びをそれぞれが楽しんでいる平行遊びであることが多い。おおむね4歳の子どもは仲間との繋がりが深まる一方で競争心が生まれけんかが多くなる。しかしそこで自己主張をぶつけ合い悔しい思いを経験しながら相手の主張を受け入れたり、自分の主張を受け入れてもらったりする経験を積み重ねる。また、少しずつ決まりの大切さに気付く、守ろうとする。おおむね5歳の子どもは、友達と遊びを発展させ、楽しむために自分達で決まりを作ったりする。また、仲間の中の一人としての自覚が生まれ、自分への自信と友達への親しみや信頼感を高めていく。おおむね6歳の子どもは、仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする⁽³³⁾。これらの発達の特徴から、子ども同士の関わりが多く見られるのはおおむね4歳以降であることが分かる。

以上の考察から、本論で行う子ども同士の関わりを作る造形表現活動の実践は、4歳児以上の子どもを対象とし、1人では作ることができない大きな作品で、アイデアを多く必要とする「寄せがき方式」の制作遊びを設定して行うことが望ましいと考えられる。

IV 保育の視点から見た共同造形制作の意義と指導の留意点

これまで考察してきたように、子ども同士の関わりを持つ機会が少ない現代の子どもにとって、特に人間関係に関する能力の育成は、重要課題であると言える。人間関係構築能力や感情をコントロールする力などの人と関わる力は、遊びや経験を通して培われていく。そのような経験ができる場として、幼児教育・保育には大きな期待が寄せられ、そこで展開される保育内容は、ますます重要になってくる。

平成29年に『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育保育要領』が同時改訂（定）となり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿が示された。幼児教育と小学校教育はその姿を共有し連携することでスムーズな接続を目指す、その中でも共同造形制作のように友達と力を合わせて行う活動は、特に「協同性」「言葉による伝え合い」「豊かな感性

と表現」などと密接に関連する活動になると同時に、非認知的能力の育成にもつながると考えられる。

園生活において共同造形制作は、よく見られる遊びの一つである。遊びの始まりは、ごっこ遊びなどの自由遊びの中から始まる場合、行事に際してや設定保育として明確なねらいをもって始まる場合など、様々なパターンが考えられる。特に寄せがき式の共同造形制作は、友達と協力して遊びを楽しめるようになり、自分のアイデアを自分の技術で形にでき、じっくりと集中して活動に取り組めるようになる高年齢児に適した活動である。

共同で行う造形制作の最も大きな意義は、子ども同士が関わり合うことが成長の機会につながることだろう。例えば、それぞれにやりたいことがあり、それをみんなでまとめて一つの作品にしようとする意見がぶつかる。問題を解決しないと遊びが進まず、最悪の場合、遊びが終わってしまうことも考えられる。そこで子どもは、どうやったら折り合いをつけられるかを、友達の意見を受け入れたり自分の意見を主張したりしながら、自分達で考え解決しようとする。友達との関わりの中で、相手の意見に耳を傾ける必要性や自分の意見を言葉で伝える大切さを学び、みんなと力を合わせて楽しく活動するために自分はどう振る舞わなければならないかを考えられるようになる。改めて、決まりやルールの大切さにも気付くだろう。そのような経験の積み重ねが、集団で意見をまとめる方法を学ぶきっかけになったり、集団への帰属意識や仲間意識が育ったりするための機会にもなる。

また、作品が完成した際に得られる達成感や満足感は、個々の活動よりも明らかに大きい。手間や時間を掛ければ掛けるほど、作品に対しての愛着も沸く。制作が大がかりになれば、進捗状況を発表し合うなどの取り組みも必要になる。保育者としては、思いついたアイデアや工夫したことを言葉で相手に分かりやすく伝える中で、その楽しさや喜びも味わって欲しいと願うだろう。

このような経験がより豊かなものとなるための保育者の援助や環境構成は、極めて重要である。子どもの成長、発達に必要な経験ができるチャンスを逃さず、子どもの主体性を尊重し、集団を望ましい方向に導くのが保育者の役割となる。それぞれのやりたいことや思いを共有できる場と時間の設定も欠かせない。制作に何日も要するような大がかりな活動であれば、「明日も続きをやりたい」と思えるような興味や関心が持続するための働きかけも必要になるだろう。その上で、集団が同じ目標に向かうことができるよう、「みんなで力を合わせる」という意識を持てるような雰囲気作りと援助が保育者には求められる。その意識が高まれば、問題が起きてもみんなで話し合うことから自分達で解決方法を導き出そうとするようになる。

また、保育者には、活動にはそれぞれの意見が反映され、みんなが納得した形で取り組むことができるよう、それぞれの考えや思いをつなぎ、集団としての意見をまとめる力量が問われる。子ども同士の関わりからの学びを重視し、その集団らしさを引き出そうとすればするほど、保育者の関わりや援助は難しい。子ども同士の関わりに介入し過ぎることには十分に配慮し、子どもの主体

性を大切にしながら保育者自身も仲間の一員として活動に加わる中で、状況に応じて子どものアイデアを実現するための提案や助言をしていくことが求められる。

参考・引用文献

(1) 大豆生田啓友：「保育内容とは何か」，(森上史朗・大豆生田啓友・渡辺英則/編：『新・保育講座④保育内容総論』)，ミネルヴァ書房，10-11頁，2001年。

(2) 藤田和也：「今日の子どもの発達困難と日本社会」(田中孝彦・藤田和也・教育科学研究会/編：『現実と向き合う教育学—教師という仕事を考える 25 章—』)，大月書店，53-60頁，2010年。

(3) 文部科学省：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申)」，2005年。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102/002.htm (2016/05/20 閲覧)

(4) 文部科学省・前掲ホームページ(3)

(5) 文部科学省：「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～審議経過報告のとりまとめについて」，2011年。

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1310607.htm (2016/05/20 閲覧)

(6) 厚生労働省：「平成15年版厚生労働白書」，2003年。

<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/03/> (2016/06/10 閲覧)

(7) 内閣府：「平成19年版国民生活白書」，2007年。

http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/
(2016/06/10 閲覧)

(8) 内閣府：「子ども・子育て支援法に基本指針」，2014年。

http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kodomo_kosodate/k_5/pdf/s1-1.pdf (2016/06/10 閲覧)

(9) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』，フレーベル館，5頁，2008年。

(10) 厚生労働省：『保育所保育指針解説書』，フレーベル館，8-9頁，2008年。

(11) 内閣府：「認定こども園について」，2014年。

http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kodomoen/k_1/pdf/s2.pdf#page=1 (2016/06/10 閲覧)

(12) 内閣府：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』，フレーベル館，9頁，2015年。

(13) 文部科学省：『幼稚園教育要領解説』，フレーベル館，8頁，2018年。

(14) ①厚生労働省：『保育所保育指針解説書』，フレーベル館，8頁，2018年。

②内閣府：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』，フレーベル館，1頁，2018年。

(15) 中澤潤：「友だち—仲間関係と友だち関係—」，(保育者と研究者の連携を考える会/編：『保育における人間関係』)，ナカニシヤ出版，36頁，2000年。

- (16) 榎原博美：「現代社会の問題と保育内容『人間関係』の課題」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』，第 34 号，149-156 頁，2012 年。
- (17) 松寄洋子：「遊びと仲間関係」，(高橋たまき・中沢和子・森上史朗/編：『遊びの発達学展開編』)，培風館，1996 年。
- (18) 佐藤哲也・田井敦子・畑中ルミ・赤木公子：「遊びの協同性を促す実践的視座」、『宮城教育大学紀要』，第 49 号，205-220 頁，2015 年。
- (19) 文部科学省・前掲書(9)，259-263 頁。
- (20) 文部科学省・前掲書(9)，100 頁。
- (21) 文部科学省・前掲書(9)，166 頁。
- (22) 文部科学省・前掲書(9)，165 頁。
- (23) 文部科学省・前掲書(9)，168-169 頁。
- (24) 熊本高工：『絵画製作・造形 その指導と実際』，同文書院，5 頁，1979 年。
- (25) 中野友三：「幼児造形表現の見方，育て方」、『比治山大学短期大学部紀要』No.37，2002 年。
- (26) 文部科学省・前掲書(9)，163 頁。
- (27) 森上史朗：『新保育内容講座第 6 巻 絵画製作・造形』，光生館，221 頁，1982 年。
- (28) 文部科学省・前掲書(9)，6 頁。
- (29) 無藤隆：『ここが変わった！ 新幼稚園教育要領 改訂のポイントと解説』，チャイルド本社，30-31 頁，2008 年。
- (30) 文部科学省：「子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」，2009 年。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286156.htm (2016/08/08 閲覧)
- (31) 松井寿美子：「幼児の共同制作の指導(1)」、『聖カタリナ女子短期大学研究紀要』，第 33 号，37-54 頁，2000 年。
- (32) 田中義和：「子どもの発達と描画活動の指導」，95-96 頁，ひとなる書房，2011 年。
- (33) 厚生労働省・前掲書(10)，38-54 頁。

Fundamental Study to Create a Joint Modeling Bringing up a Skill to Build a Relationship in a Childcare Facility

Minori YAMAGUCHI*1, Kei TAKAHASHI*2, Noriko BABA*3, Yuzo WATANABE*1*4, Toshiyuki TAKAHASHI*5

Due to recent social changes, we can see changes in how children play and it is required to have activities that they can really into by exercising independence or opportunities in which they can exercise creativity by communicating with friends. Accordingly, we can indicate that communication among children through playing will be an important issue to grow morality and sociality as well as growing skills to build a relationship. As one of activities to grow skills to build a relationship, we can consider a joint modeling. In this study, we consider that practices of activities to express modeling that build a relationship among children should be a big work that cannot be created alone therefore it is desirable to proceed such practices by setting a play to create a “message method” that require a lot of ideas. Creative play has many elements created by sharing images with friends for children and we consider that they can devise themes, colors, and shapes.

Keywords : Childcare facility, Child (Children), Skill to build a relationship, Joint modeling

*1 Minan Manmaru childcare center

*2 The Major of Child Education, The Department of Music, Sakuyo Junior College of Music

*3 The Department of Childhood Education, The Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

*4 The Joint Graduate School (Ph.D. Program) in Science of School Education Hyogo University of Teacher Education

*5 Graduate School of Education, Okayama University
